

カムイユカラ(神謡): 「この砂赤い赤い」(「タノタフレフレ」)解説

(1)神謡というジャンル

ところどころに「サケヘ」と呼ばれるリフレインを伴って語られる、韻文の物語であり、地域によってオイナ、カムイユカラなどいくつかの呼称がある。さまざまなカムイ(神、特に動物神)同士の間起きた出来事を内容とするものが多い。オキクルミ、オキキリムイ、あるいはサマユンクルなどと地域によってさまざまに呼ばれる神(人間の味方)となってくれる。いわゆる「人文神」「人文英雄」が登場するものもある。内容は必ずしも子ども向けではない。口演時間は十数分程度のものである。リズムを整えるためにアトムテイタク(飾った言葉)と呼ばれる特殊な文体で語られる。

(2)本作品の原作について

知里幸恵『アイヌ神謡集』(1923年刊)所収の13篇の神謡から、第11話「タノタフレフレ」(日本語題「この砂赤い赤い」)をアニメ化した。

『アイヌ神謡集』所収の13編の神謡はローマ字による正確な幌別方言アイヌ語表記と精密な日本語訳の対訳形式である。いずれも録音から文字化されたものではなく、伝承者本人が筆録したものである。したがって本作品の原作とした第11話も文字資料だけであり、他の伝承者による類話の録音も発見されていない。「タノタフレフレ」というサケヘは掲載されているが、それだけから元の語り方を復元するのは困難である。そのため今回の音声は朗読とした。アイヌ語朗読は木原仁美氏による。

(3)アニメ化にあたって

人間の味方である神オキキリムイ(他地域ではオキクルミなどとも呼ばれる。また道東などではサマユンクルが対応する)がニツネカムイと呼ばれる魔物を退治するというタイプの話である。本作の登場人

物はそれぞれポン・オキキリムイ「小さな・オキキリムイ」およびポン・ニツネカムイ「小さな・ニツネカムイ」となっている。『アイヌ神謡集』に付された知里幸恵の註によれば、彼らはそれぞれ「オキキリムイの子ども」「ニツネカムイの子ども」である。今回のアニメでも子どもとして登場する。オキキリムイはしばしば普通の人間の姿で魔物を挑発し、先に手を出させて退治する策略家である。アニメの「ポン・オキキリムイ」もアットゥシを着た普通の人間の子ども姿とした。ポン・ニツネカムイの着る小袖にはそれらしい模様がついていると思われるが、描写がないため今回は胡桃の葉を図案としてあしらってみた(手に胡桃の実を持って登場するのもアニメの創作)。物語後半で取っ組み合う場面の「下着」にかんしては、資料が少なく基本的に推測によるものである。

この話では本来先手を取るはずのポン・オキキリムイがポン・ニツネカムイに待ち伏せされるような格好となっている。それ自体もポン・オキキリムイの策略だという解釈も可能であるが、アニメでは素直に「まずは先手を取られたがすぐに取り戻す」という演出にした。アニメ化にあたっては誤植と思われる部分を除き知里幸恵の原文を尊重してそのまま用いた。「殺してしまって」などの表現も原文のままとした。



イヌンケ(子守唄): チコロポポ ネクス チシ(赤ん坊の知らせ)解説

(1)子守唄というジャンル

子守唄のアイヌ語名称は地域によって異なり、イヨンノッカ(沙流など)、イヨルイカ(沙流・鶴川など)、イフンケ(近文・帯広・樺太など)、イウンケ(荻伏・春採など)、ユンケ(美幌・樺太の真岡など)、イヌムケ(フブシナイ)、イヌンケ(釧路など)などさまざまである。子守唄は必ずしも歌詞やメロディーが固定されているものではないが、個人や地域によって「曲」と呼べるものも確かにある。

(2)本作品の原資料について

白糠出身の四宅ヤエ氏(1904~1980)伝承の子守唄である。原資料の録音は齋藤明氏によるもので、収録年月日は1967年8月23日である。同じ内容の歌と思われるものが、より短いバージョンとして冨水慶一郎氏によって1968年に採録され、『冨水慶一郎採録 四宅ヤエの伝承 歌謡・散文篇』(2007年 CDつき)に「子守歌(お前の父親は川上にいると、子供を叱って歌っている)」として収録されている。

本作に収録した録音は四宅ヤエ氏御令孫の平良智子氏の口演による。

(3)アニメ化にあたって

本作は「泣きやまない子どもと母親」にかんする部分と、その母親の語る「寄りクジラの話」の部分に分かれている。その入れ子構造を表すために、後者においては人物のデザインを変えていくぶん記号的な表現としてある。

伝統的なアイヌ文化には現在の西欧や日本の文化とは異なる部分がある。例えば母親が赤ん坊の前でタバコを吸うのは、現在ではあまり感心できない行為とされよう。だが、北方の伝統的な社会の多くではタバコはさほど害がないもの、むしろ神々に属する重要な文化要素とみなされてきた。また、現在の工業生産物としてのタバコとは異なる部分も多かったであろう。アニメの中でも神々へ捧げるものとしての在り方を描こうと試みた。また、入れ子構造で語られる「寄りクジラ」の話もきわめて北方的な物語である。アイヌ伝統文化ではクジラ猟も行われていたが、圧倒的に多いのは死んで海岸に打ち上げられる、いわゆる「寄りクジラ」の利用であった。これは海岸部では非常に重要な食料源であった。なお、しばしばシャチの獲物の一部が打ち上げられることから、シャチは「人間に鯨を贈ってくれる存在」とみなされていた。シャチがレプンカムイ「沖の神」と呼ばれるのはそのためだったのかもしれない。



ユカラ(叙事詩):「ニタイパカイェ」解説

(1) 叙事詩というジャンル

叙事詩はメロディを伴う長編の物語である。地域や内容によってユカラ、サコロペ、ハウキなどと呼ばれる。神謡と違いリフレインなしで語られる。ポイヤウンベ(「幼い・本島の・者」の意)あるいはオタストウンクル(「浜の・ふもとの・者」の意)という少年英雄の冒険と結婚を内容とする。ヒロイン側からの視点で語られるものもある。登場人物は不思議な力を持ち、空をとんだり幻を見せたりして戦う。語り手や聞き手はレツニという棒で囲炉裏縁を叩いてリズムをとり、聞き手は必要に応じて合いの手を入れる。数時間におよぶものも珍しくない。

(2) 本作品の原作について

本作品はニタイパカイェという魔物とポイヤウンペが戦う叙事詩をアニメ化したものである。資料としては鍋沢元蔵(モトアンレク)氏筆録による『アイヌの叙事詩』(門別町郷土史研究会 1969年)、同氏の未公開ノート(国立民族学博物館蔵)、萩中美枝氏の録音による平賀サダモ氏の語り(1967年録音 北海道立アイヌ民族文化研究センター蔵)などがある。今回はこれらを参考として新たに脚本を書き起こした。

(3) アニメ化にあたって

叙事詩は対句や定型句を多用した特殊な韻文体で数十分から数時間かけて語られるため、そのまま映像を同期させたアニメを作成するのは困難である。今回は内容をほぼそのまままで10分程度の脚本に再構成した。アイヌラックルの妹を巡るカンナカムイとの戦いは省略した。脚本は日常会話体で書きおこしたが、随所に叙事詩の表現を活かした。

ポイヤウンペたちが身にまとうハヨクペ「鎧」あるいはカネコソソテ「金属の・小袖」、頭に被るカネポンカサ「金属製の・小さな・笠」は実際に残された民具とは異なる架空のアイテムである。資料の描写を参考に「日本・西洋・中国など特定の地域のものではない鎧」をデザインした。カネポンカサはいわゆるカサ(イノウカサ)より小型で、刀をそらす描写などから表面に凹凸がない形状にした。

鎧は腰回りに小袖のイメージを残した。ウウオッカネクツ「互いに・ひっかかった・金属製の・帯」は金属製のベルトをイメージした。金属製ベルトに刀を挟むのは不合理なので吊り下げ式とした。ポイヤウンペがトゥムンチカムイに借りる「黒い鎧」はトゥムンチカムイ夫妻の衣服や持ち物と同様に赤黒の2色とした。赤い部分は他資料に登場する鎖帷子らしきものをイメージしてある。

竜巻の魔物ニタイパカイェ(あるいは「ニタイパカイェ・ニタイパラマ」)の鎧は全くの創作である。彼の率いるウエンカムイ「悪神」の軍勢には他資料に登場する鳥や蛇、さらに「犬についた虫さえも切った」という定型句から想像をふくらませて虫型の魔物も登場させた。

